

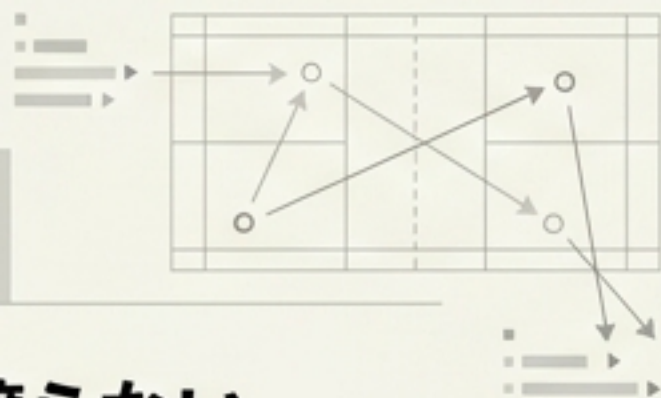
ぜんぶ勝とうとすると勝てない

なぜ「練習で勝つ人」は、試合で無残に崩れるのか。
勝利の因果を解き明かす構造論。

「練習での全勝」は、試合での「勝利」を約束しない。

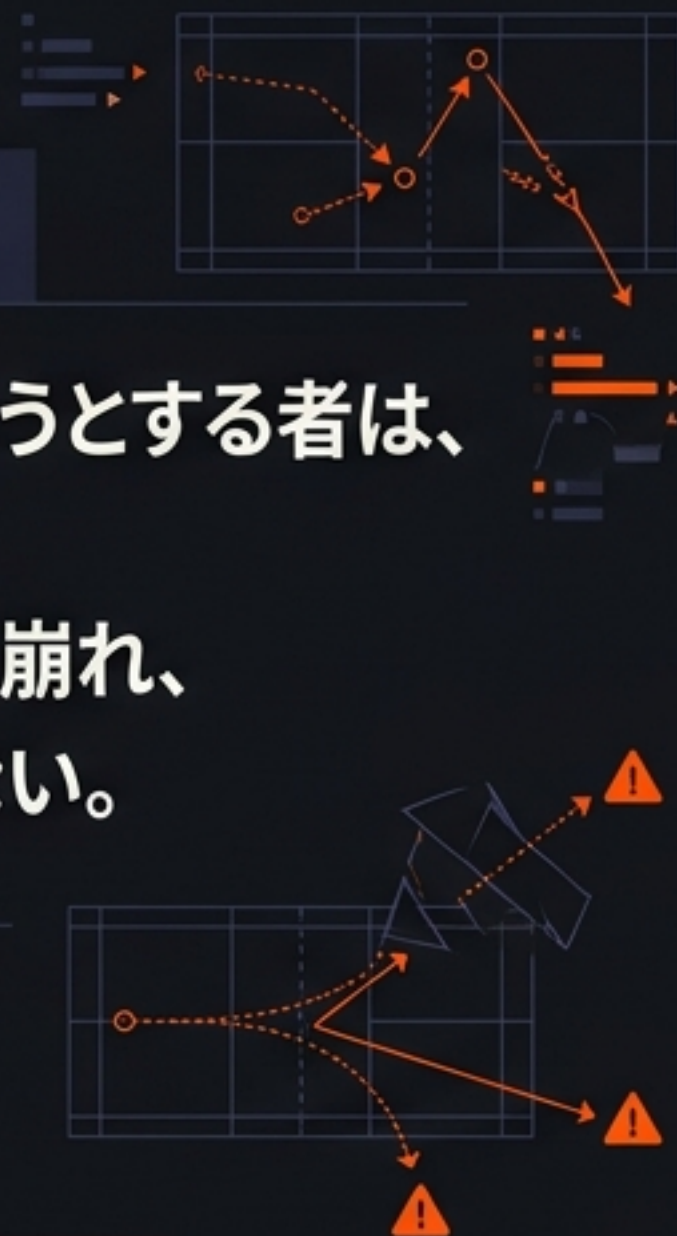
一般的な錯覚

練習から1点も譲らない。
基礎打ち(クリア、ドライブ、
ヘアピン)のすべてで勝負する。
それが勝利への執念であり、
近道であると信じられている。



構造的な現実

基礎打ちで勝とうとする者は、
基礎打ちでは、
試合で真っ先に崩れ、
結果的に勝てない。



これは**気持ち**の問題ではない。**勝負根性**が足りないわけでもない。
純粹な「**構造**」の問題である。

その熱心さは「勝つための準備」か、「安心するための作業」か。

30%

一見すると…

- よく動いている
- 強気に打ち込んでいる
- 負けず嫌いで熱心に見える

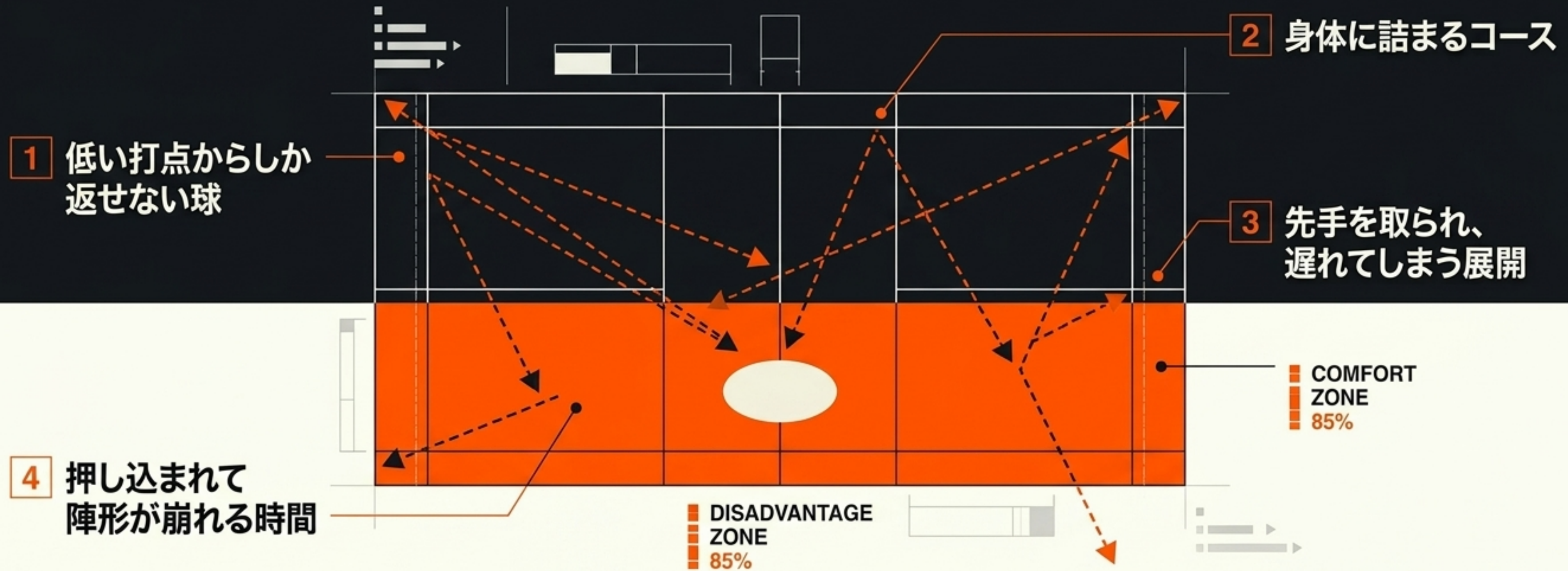
70%

実際には…

- 無意識に、自分が有利になる配球(打ちやすい高さ・テンポ)を選んでいる。
- 自分が下手に見える場面(不利側)への突入を徹底して避けている。

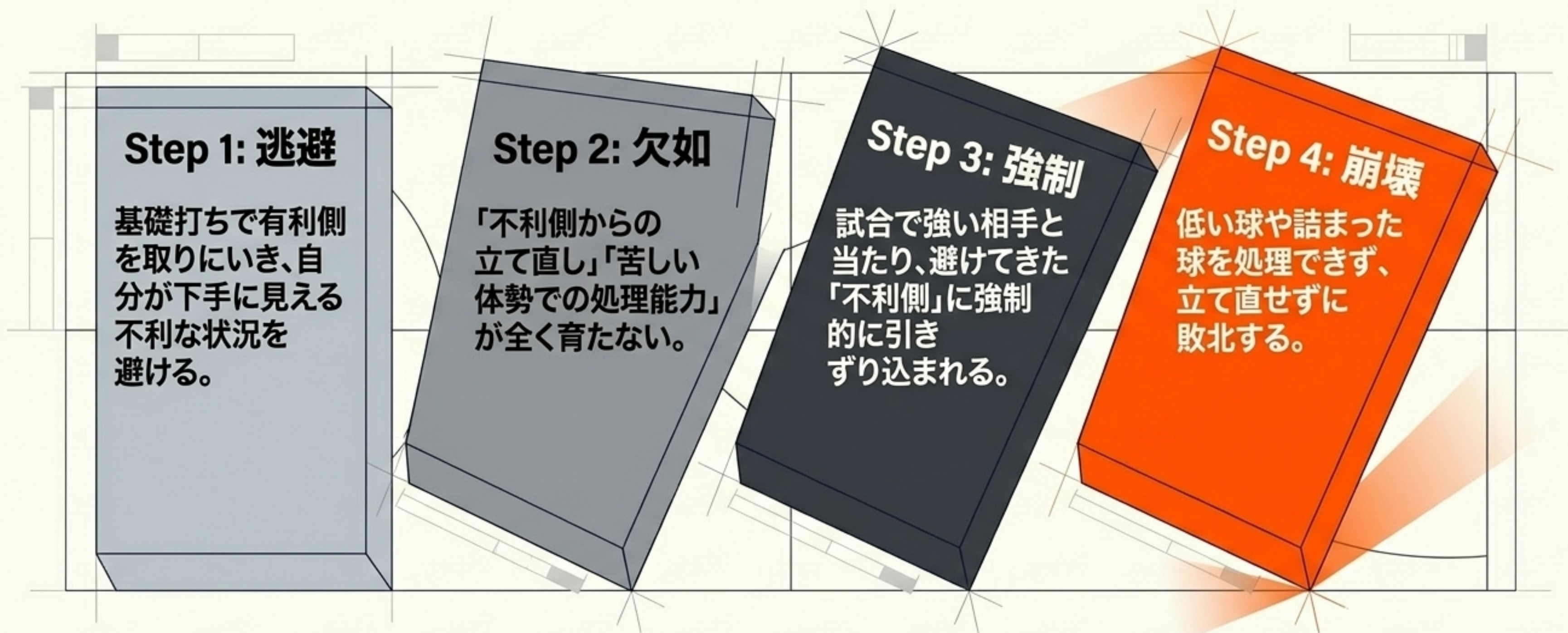
勝つための練習ではなく、
「勝っている自分を確認する練習」にすり替わっている。

強い相手との試合は、「不利側」に立たされる時間の連続である。



試合は優しくない。強い相手は、こちらの「有利側(得意な形)」を消し、容赦なく「不利側」へと引きずり込んでくる。

練習で「不利」を避けた代償が、試合での崩壊を招く。



試合で突然弱くなったのではない。
練習で「不利側の自分」を育ててこなかっただけである。

練習中に押される
自分を見たくない

相手に主導権を握られる
自分を見たくない

**「勝ちにこだわっている」
のではなく、「負けている自分」
を見たくないだけではないか。**

ミスする自分
を見たくない

下手に見える自分を見たくない

**勝利への執念が強いのではない。「負けている自分を見る耐性」が
極端に低いのだ。この見栄が、勝つための練習を根底から壊す。**

2つのマインドセットの決定的違い

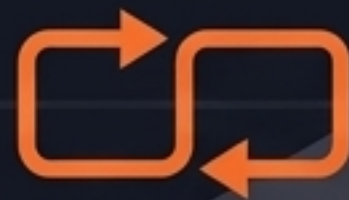
	全部勝とうとする人	本当に勝つ人
【練習の目的】	勝っている自分を確認し、安心する。	自分の弱点を発見し、負け筋を潰す。
【配球の選択】	自分が気持ちよく打てる条件（高さ・テンポ）を選ぶ。	自分が楽をしない条件、打ちにくい球をあえて選ぶ。
【不利への態度】	苦しくなる前に、自分の得意な形へ逃げる。	不利側を積極的に引き受け、崩れた自分を観察する。
【試合での姿】	崩された瞬間に終わる。	崩れても、そこから戻れる。

基礎打ちは「勝つ場」ではない。 試合の「負け筋」を先に潰す場である。



柱1:不利側の 経験値獲得

相手が打ちやすい球
をあえて返し、
苦しい体勢を作る。



柱2: 再現性の構築

遅れた状態からでも、
簡単に失点しない
身体と判断を作る。



柱3: 負荷の事前購入

試合で必ず発生する
「必要な負荷」を、
練習の中で先に
買っておく。

勝負を決めるのは「気持ちよく打てる場面」ではない。
「不利になったときに、壊れるか、戻れるか」である。

勝ちたいなら、 練習で「勝ち役」ばかり取るな。

- 基礎打ちで強く見える必要はない。
- 常に有利側に立つ必要はない。
- 弱い自分を材料にし、不利側を育てろ。

試合で勝つ人は、
練習で負け筋を先に潰している。
本当に勝ちたいなら、ぜんぶ勝とうとするな。